

国立国語研究所学術情報リポジトリ

One Hundred Year's Tendency of Increase of "-te itadaku" in Okazaki: Democratization of Honorifics in the Case of Benefactive Expressions

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 史雄, 金, 順任, 松田, 謙次郎, INOUE, Fumio, KIM, Soonim, MATSUDA, Kenjiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000495

岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向

——受惠表現にみる敬語の民主化——

井上 史雄^a 金 順任 松田謙次郎^b

^a明海大学／国立国語研究所 時空間変異研究系 客員教授

^b神戸松蔭女子学院大学

要旨

この稿では、対人関係調節のための新表現が実時間の 100 年間でどのように増加したかを論じる。具体的には、敬語に関わる新表現「ていただく」における進行中の言語変化をみる。岡崎市の 55 年にわたる計 1000 人規模の大規模社会言語学的調査に基づき、年齢という見かけの時間を利用する。間隔の異なる 3 回の調査結果を、時間軸を忠実に反映できるグラフ技法によって提示したところ、「てもらう」「ていただく」が着実に普及しつつあることを、確認できた。これは日本語の補助動詞の発達、授受表現の普及と一致し、岡崎という東海地方の都市の変化が日本語史全体と深く結びついていることが分かった。

この背景には敬語変化の普遍性がある。ヨーロッパの二人称代名詞の用法における「力関係から連帯関係へ (from power to solidarity)」と並行的な変化が、現代日本語の敬語でも起こりつつある。つまり地位の上下による使い分けから、親疎による使い分けに変化しつつある。コミュニケーションの民主化・平等化が進んだと考えられる。

また、場面による使われ方の違いをみると、依頼表現に伴って多用されるようになった。つまりかつての身分、地位による敬語の使い方と異なった基準が導入され、場面ごとの心理的負担や親疎関係がからむ。このメカニズムも、敬語の民主化・平等化として解釈できる。

新表現が個人の一生の間にいかに獲得されるかをみると、若い世代が最初に採用するわけではない。対人関係にかかわる現象に関しては、社会的活躍層が使いはじめる。ボライトネスや敬語などで、30 代以上の壮年層が最初に新表現を採用する例、成人後採用の実例が認められた*。

キーワード：実時間調査、年齢差、場面差、敬語、進行中の言語変化

1. 敬語理論と岡崎調査

1.1 敬語の民主化・平等化と「ていただく」

1.1.1 敬語の民主化・平等化とは

現代日本語の敬語は様々な面で変化を重ねている。そのうちのかなりが長期間にわたる歴史的変化の現代的な一局面と位置付けられる。かつて三つの変化要因を挙げた (井上 1999)。①敬意低減の法則、②敬語自体の丁寧語化、③敬語の民主化・平等化。その後方言接触を考慮し、④方言化を加えた (井上 2012d, 2012e)。①と②は言語内要因と関係し、③と④は言語外要因と関係する。

* 本稿の資料は科研費報告書および関係者への配布 CD による。松田は岡崎電子データを使いやすい形に編集した。データの処理形式は松田提供の形式による。統計処理はエクセルにより金が分担した。金は多くの事象について回答の有無を調べて数値データを形にし、各種グラフを作成した。アイデアおよび執筆の大部分は井上による。井上はグラフをもとに考察し、最初に文章化した。その後下書きの段階で 3 人が点検し、文章に手を加えた。数値・グラフの点検には原田幸一の協力を得た。査読の段階でグラフの数値や提示法、岡崎調査基礎情報の補充などについて貴重な助言を得た。深く感謝する。

このうち本稿のテーマ③については、多くの研究者が以下のような多様な名付けを行っているが、実質はほぼ同様の現象を指している。上下敬語から左右敬語へ、身分敬語から役割敬語へ、地位敬語から商業敬語へ、力（権力）power から親疎 solidarity へ（Brown and Gilman 1960）、縦社会から横社会へ、敬意から心理的距離へ、ウエシタからウチソトへ。

これらは、封建的固定的身分制度によって敬語が生じたという世界史的視点からみて、それと対立させる形で「民主化・平等化」と呼べる¹。近代の「四民平等」などのかけ声は、敬語の変容に効果がなかった。戦後民主主義の遅ればせの浸透と一致して進行した現象とみられる。敬語の「民主化・平等化」の動きは、文化庁の意識調査でもみられるし、例えば60年近くに及ぶ学習院作文にもみられる（鈴木2000）。学習院作文では、謙讓語の代わりに「ていただく」が普及したとみられる（井上2011）。

他に②敬語自体の丁寧語化への動きもある。一方従来の文法的敬語の解体への兆しもみられる。これに伴い、敬語実用書で、決まり文句、クッションことば、ビジネス用語を解説し、アルバイトにマニュアル敬語、文字どおりのコンビニ敬語を教え込む傾向がみられる。敬語5分類（文化審議会2007）は視野が狭く、論理的矛盾があり、自壊の可能性をはらんでいる（井上2007）。

以上の敬語変化の四つのメカニズムが岡崎の地でどう作用したかは、未解明だった。以下では「ていただく」に着目するが、第4節で述べるように、他の多様な言語要素を考察し、最終的には多変量解析法によって総合的に分析することが目標である。

松田他（2012）では、丁寧さに関する主成分分析の結果を「敬語の民主化」の表れとしてとらえた。本稿で扱う受惠表現「ていただく」も、場面の順番は一致を示さないが、語形（発想）かという民主化の表れの例としていい。

1.1.2 「ていただく」進出の歴史的背景

この敬語変化の流れの中に、「ていただく」の進出が位置付けられる（井上2011）。「ていただく」は典型的な授受表現・受惠（受益）表現であり、近世以降の発達である。また補助動詞一般も、近世近代の発達による。古代的・中世的な助動詞が（文法化の過度な進行によって）機能を縮小し、代わりに新たな文法化として補助動詞が進出したとも言える。近代語の分析的傾向にも合致するし、動詞における方向性の表現とも関わる。

語源にさかのぼると「頂く」「戴く」であり、上から下への動作を示す本動詞に由来する。現今の「ていただく」の多用、頻出は、井上（1999, 2011）でも指摘した。また「ていただく」の用法の拡大は、使用例の形で多様な文献に記されている（菊地1997）。また主な使用者は必ずし

¹ 経済発展段階によって世界史的に社会体制を順序付けるという考えを踏まえる。ただしマルクス主義のように共産主義が最終的な（理想的）段階とはとらえない。民主化・平等化という名は、そもそも社会経済的レベルの違う共産主義体制と対比させられることもあるために、国家によっては誤解を招く名称だが、すでに「民主化・平等化」として使われているので、変更の必要を感じない（井上1999）。また現代敬語の「民主的」は戦後まもなく「封建的」と対立して用いられた用法を踏まえる。敬語用法に反映するのに半世紀かかったともみうる。

も若年層ではなく、社会的活躍層と言える。

「ていただく」は、敬意低減の法則が働いて敬意の程度の下がった「てもらう」に代わって進出したもので、美化語の用法である²。ことに20世紀末期から、「～せていただく」の形で東京の話しことは、ひいては標準語・共通語として急速に広がった（菊地1997）。「読ませてもらった」のような「さ入れことば」をも派生して、誤用論議を巻き起こしている（佐野2008）。この新しい傾向は首都圏で際立つが、少し前の方言分布をみると近畿出自で、井上（2011）に掲げた日本地図にみるように、関西付近に密に分布する³。すでに柳田（1963）が「てもらう」が関西風であることを指摘していたことを思い起こすべきである。

敬語は身分の上下関係を示す機能を薄めた。現代では「ていただく」によって、擬制的な恩恵関係の授受を暗示する。上下関係でなく左右関係を表し、架空の恩恵関係を用いる表現であり、謙譲語の使いにくさに代わって出たと考えられる。謙譲語は形の上ではすべての動詞に作れるが、実際には用法の制限があり、適切な使用場面が少ない。恩恵関係の生じうる場面なら、受容度が大きい。このように使用メカニズムの難しさがあるのに加え、形の混乱があり、尊敬語との混同が敬語実用書で指摘される（井上1999）。

井上は左右敬語として位置付けたが、似た考えは、吉岡（2011: 28）にもみられる。また山岡他（2010: 153）は配慮表現の一つとして、「授受受動化」を挙げる。文法的な敬語と別な形で人間関係を調節し、待遇表現を使いこなす。

以下の岡崎100年のタイムスパンに及ぶ調査結果（国立国語研究所1957, 1983, 2010）は、この数百年の敬語発達史の一貫した動きの、かなりの部分をカバーする。また岡崎の100年は、個人の一生（記憶としての数十年）より長い。つまり岡崎調査は、日本語史と個人史の両方をつなぐ効果がある。さらに『方言文法全国地図（GAJ）』（国立国語研究所1989～2006）でみると、岡崎は「ていただく」の分布地域の東端よりさらに東に離れている。東京には「ていただく」が飛び火の形で伝播したと考えられる。「ていただく」は大都市調査（国立国語研究所1981）にも現れるので、年齢層別に対比すれば分かる。岡崎の100年間の推移と、東京の近代語史とを対比することによって、伝播の様相が実証できるであろう。

1.1.3 変化メカニズムと受惠表現の拡大

敬語の民主化・平等化の動きは、敬意低減の法則と同じく、多くの面に現れる。使用者の増加、使用場面の拡大、用法文脈の拡大などである（井上1999）。そもそも個々の言語変化は多くの要因の複合によって生じるし、他方変化要因は多様な言語変化に現れる。もちろん作用の強弱がある。そのうちで強い因果関係（結びつき）を示すペアを取り上げると説明しやすいが、多様な関係を忘れてはいけない。民主化・平等化を示す敬語事象は多いが、その典型が「ていただく」の普及である。論理的に説明しやすく、分かりやすいのが利点である。

² 受惠表現は方向性を示すので、人称指示の代用もなす。

³ このために司馬遼太郎の謬説が広がった。「ていただく」を浄土真宗の教理と結びつけるのは、時代錯誤である。

1.2 岡崎データの理論的位置付け

1.2.1 二つの視点

以下では具体的データとして岡崎敬語調査の結果を利用する⁴。従来にはない視点として、(1) 受惠表現に着目して、狭義の敬語以外の現象をみる。また(2) 時系列の実年代の表示技法を改良し、またエクセル散布図を利用し、半世紀の増え方が一定傾向を示すことを明らかにする。これは、表示技法の有効性ととともに、岡崎調査データの信頼性の高さを示す。岡崎データには多様な分析が可能なることを提言したいが、本稿はその1例である。

1.2.2 理論的背景

敬語については、地理と歴史の対応として、方言分布と日本語史のきれいな呼応がみられる。タブーを出発点に、絶対敬語から相対敬語へ変化し(金田一 1959)、さらに丁寧語化へ変化した。これは、文献国語史でも確認され、また地理的(方言)分布としても観察される(井上 2011)。ただし、現代は従来のいわゆる敬語形式の出現だけではとらえきれない状況になった。現代敬語を適切に分析、記述するためには、待遇表現、配慮、ポライトネスなどの広い視点が必要である。受惠表現の「ていただく」が顕著な例で、左右敬語、対者敬語化の具現と言える。岡崎敬語調査は、現代日本語敬語の動向と対応をみせる⁵。前述の敬語の民主化・平等化についても、岡崎敬語の半世紀は近代・現代敬語の動向のかなりの期間を実年代で示す。

1.2.3 調査文の実例 道教えと医者

以下では、岡崎調査の質問文と回答の具体例を、大づかみにみる。調査の時期(第1次 1953年、第2次 1972年、第3次 2008年)や質問文(場面設定)の細部については、報告書を参照されたい⁶(国立国語研究所 1957, 1983, 2010)。まず「てもらう」は、荷物預けと医者で同じ程度に使われるようになった。荷物預けでは純粹の受惠表現が使われ、医者ではいわゆる敬語表現が伴う。次に「せていただく」は依頼場面で急増した。相手の動作に「てもらう」「ていただく」を使うのは、左右関係・受惠関係を疑似的に示す。以下に調査票の2場面を示す。

「101 道教え わたしのような旅行で来た者が、東岡崎駅の北口で、明代橋(みょうだいばし)はどちらかということをおあなたにたずねました。何と言って教えますか。

ココオ マッスグ イッタラ スグデス」

「てもらう」「ていただく」は調査票のカタカナ回答例には当然ながら使われていない。ところが第3次調査では、次のように実例が多く出た。

⁴ エクセルデータが希望者に公開される。国立国語研究所ホームページを参照。

⁵ 井上の口頭発表(2012a)で全国の「いただく」の増加について言及した。それに関して辻加代子の「岡崎でも増えているようだ」との一言が、本論文のきっかけになった。実際にどのように増えているか、以前の調査データと照合しながら考察する。

⁶ 第1次と第2次の調査報告書はインターネットで公開されている。また第3次の概要は科研費報告書として出版された。3回の調査での項目(場面)や質問文の異同も掲載されている。

「キタグチオ デテ スグノ コーサテンオ ワタツテモラツテ マッスグ イツテモラツタ
トコロガ ミョーダイバシデスヨ」

「キタグチオ デテイタダイテ ソノママ マッスグ ススンデイタダケレバ ハシニ アノ
アタリマス」

「108 医者 あなたの家の近所の人が急病になりました。あなたが頼まれて、近所のお医者さんの家に行くと、お医者さんが玄関へ出てきました。この近所のお医者さんに、すぐ来てもらうのには何と言って頼みますか。

アノー、ウチノ トナリノ オクサンガ キュービョーニ ナリマシタノデ、センセー
スグ キテイタダケマセンカ」

この場面ではそもそも調査票の回答例に「ていただく」が使われている。第3次調査の回答実例では、医者⁷の動作に「てもらう」「ていただく」を使う。

「キンジョノヒトガ チョット キュービョーナノデー イツショニ キテモラエマスカ」

「スママセン キンジョノヒトガ エー ビョーキナノデ スグ キテイタダケマセデショカ」

1.3 敬語変化の見方とデータの必要性

言語変化は様々な形で観察できる。いわゆる誤用は、変化の先駆けとみることができる。一方、現実の使用状況を見ると、すでに普及していることが分かることがある。文化庁をはじめとする世論調査でも分かるし、インターネットで使用例を探しても分かる。これらはのちには正用とみなされるだろう。このプロセスは、かつて（例えば戦前）の敬語指南書などで指摘された誤用が今正用として堂々と使われることでも示される。岡崎のデータもある時点での慣用を示すとらえうる。

方言（共通語化）調査や2言語併用の研究成果と合わせると、恐らく3世代（つまり100年前後）が、言語変化に必要な最少年数だろう。しかし大きな地域社会では、いわゆる誤用の拡大過程や変化が一斉に起こるわけではない。場面による使い分けもあり、新旧が併用される期間も長い。敬語については、残念ながら戦前の実地調査結果は管見の限り見当たらない。戦後間もなく岡崎で行われた調査は、後世の研究の重要な礎石、基準点、出発点になる。岡崎での変化の速さは、世代差を考慮に入れて、基準になりうる。

1.4 岡崎敬語の世界史的・日本史的位置付け

1.4.1 岡崎敬語の位置付け

東海地方の1都市岡崎の調査データを扱うに際して、広い視野のもとに位置付けておきたい。国立国語研究所の研究発表会（井上 2012a）では、敬語の世界的分布、世界史的発展過程を紹介し、かつ日本語史における発達過程と方言分布が周圏論的な対応を示すことをみた。岡崎の敬語は、

⁷ 調査文では「お医者さん」で、これは第1次調査から変更はない。

古代的敬語を残す地域に近く、近畿の中世的敬語と関東の近代的敬語との接点にあると、位置付けた。紙数の関係で詳論できないので、既発表の論考を参照願いたい(井上 2011, 2012b, 2012d)。

彦坂佳宣(2012.6.2の発言)によると、岡崎敬語は、方言敬語を東西に分けたときの西側タイプの東のはずれと位置付けられる。吉岡(2000)もほぼ同様のとらえ方である。今後は文化庁のデータなどを使って、実証的に位置付けることが可能になるだろう。

同じ岡崎のデータのうち、美化語についてはすでに分析した(井上 2012b)。「お野菜」「お車」を敬語と思わない人が増えている。本来の敬語的機能を果たしていた要素が変質したわけで、「ていただく」の進出の鏡像としての、敬語意識の衰退である。

1.4.2 言語変化の拡大過程

以上のような岡崎調査に、お金をかける価値があるかについて、かつて議論があった。「調べなくても分かる結論だ」という批判である。これに対しては、実証性が大切で、調査してあれば、「印象でものを言う」のではなく、「印象的にものを言う」ことができる。また大傾向をとらえることによって、一見些細な事象を位置付けることができる。ことに岡崎調査のように、生年で言って100年以上に及ぶ実態が分かる意義は大きい。長期的歴史的变化と個人の人生経験(個人史)の結節となりうるし、進行中の言語変化のタイムスパンを延長することにも役立つ。

2. 岡崎「てもらう+ていただく」の増加

2.1 「てもらう+ていただく」点数の全体的増加傾向

2.1.1 「てもらう+ていただく」平均点数の計算

まず岡崎調査3回の受惠表現を大きくとらえるために、「てもらう」「ていただく」に点数を与えて、第3次調査の値で項目をソートした。その順番に項目を並べて、第3次の全項目を1枚のグラフにし、同じ順番で第1,2次のグラフも作った。

この順番が報告書(国立国語研究所 1983)の丁寧さの順番とどう関係するか、これは数値化し、散布図で考察できる。「てもらう」1点、「ていただく」2点とし、12問全部の平均値を出した。敬語としての価値が違うので、数値化に差を付けた。医者場面などは、複数使われることがあるので、1場面に複数の受惠表現が出た場合には、それぞれに点数を与えた。反応文の受惠表現の全活用形を調べてあると考えていい。場面ごとの人数が違うので、%を出して作成した。場面ラベルは、岡崎科研報告書の第3次のラベルと一致している⁸。

2.1.2 「てもらう+ていただく」点数実年代グラフの解釈

第1次と第2次と第3次の調査の間には、19年と36年というへだたりがあり、第3次調査が2倍ほど離れている⁹。

⁸ 第1,2,3次調査で入れ換えた場面があり、対応する名前が違っている。

⁹ 9年間隔または19年間隔で年齢層を区切ると、3回の調査の間隔と年齢層がかなり一致するが、普通の10年刻みの年齢層と食い違うので、読み取りが厄介である。

第1次：1953年

第2次：1972年 19年後

第3次：2008年 55年後

グラフ作成技法として、コーホート分析（国立国語研究所 2010）に向く形式をとろうと試みた。単純な折れ線グラフを作ったときに、線の傾斜角度がそのまま変化の速度や大きさを示すわけではない。調査実施の実年代に忠実にこれを表現するには、エクセルの散布図にすればいい。または横軸を「時系列」にすればいい。

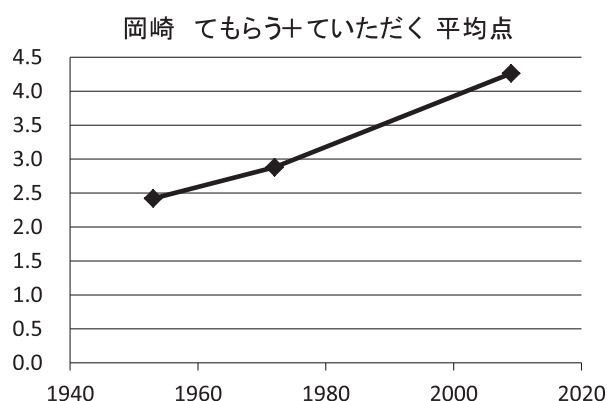


図1 岡崎「てもらう+ていただく」平均点 実年代散布図

図1では調査年の実際のへだたりを表現した。「てもらう」「ていただく」という表現の平均点は、確かに岡崎で増えているが、3回の調査はほぼ同じ傾向線をたどっている。散布図は棒グラフか折れ線グラフと違って、タイトルなどが自動的に出ない点は不便だが¹⁰、数式の読み取り、説明も可能である。このように、現実をよく反映するために、現象の読み取りもたやすいし、さらに高度な理論的視点を導入するきっかけを作る。実年代散布図の技法については、他稿を参照されたい（井上 2012c）。

2.2 「てもらう+ていただく」点数による場面の順番の変化

以上で示したのは、3回の岡崎調査全体の数値だった。回答者全員の全場面の数値の合計点（平均点）である。ベテランの言語研究者が面接調査を行い、厳格な統計技法を用いたためもあり、3回の調査全体が一定の変化傾向（速度）を示した。調査結果がきれいに示されるはずだ、という前提（見込み）をもとにデータ提示技法を新たに工夫して、きれいな結果を示すことができ

¹⁰ ラベル付き散布図のプログラムをダウンロードすれば可能になる。本論文の図で利用した。

た。全体としてきれいな、信頼できる結果が得られたなら、もっと細かくみても信頼できる傾向が得られるに違いない。この前提（見込み）をもとに、以下で細分したデータを考察する。考察はデータ行列の2次元に分けられる。2.2節と2.4節、2.5節で列としての場面（項目）別の分析、2.3節で行としての年齢層別の考察を行う。

2.2.1 岡崎3回調査の場面別の傾向と負担の大きさ

まず、個々の場面の違いを分析するために、3回の調査それぞれの合計点を扱う。年齢層別にする前に、全体的傾向を読み取ろうという戦略である。「てもらう」1点、「ていただく」2点として、総合点で考察する。

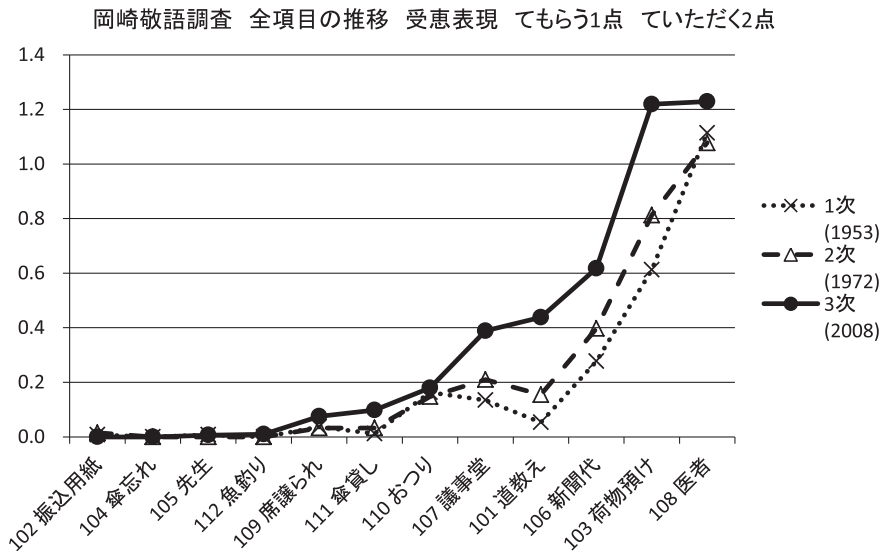


図2 岡崎「てもらう+ていただく」場面別平均点

2.2.2 点数化 場面別グラフ

図2に点数化した結果を、第3次調査の数値の順でソートして、示す。まず場面の順番をみると、右端の医者、荷物預け、新聞代（確認）、おつりなど、相手の負担の大きい場面で点数が高い。ポライトネス理論からいっても、説明できる。道教え、講事堂（道聞き）のように、相手の負担のそれほど大きくない場面でも点数が高いのは、後述のように、最近の「ていただく」の進出（過剰用法）の反映である。他の場面では点数が低い。

同じく図2で、3回の調査結果の比較をしよう。全体として後の時期になるにつれて点数が高くなる。つまり「てもらう」「ていただく」という受惠表現が増える。第3次で受惠表現が多くなったのは、荷物預け、新聞代、道教え、講事堂である。例外は右端の医者である。医者は前から多かったが、第3次であまり増えない。対話者どうしの心理的關係（受惠關係、左右關係）が前面

に出た、と解釈したくなる。のちに詳しく考察する。

図2は、後掲の図5とほぼ同一のデータで、図示の技法が違うだけである。3回の調査の詳しい比較は、図5で論じ直す。

2.2.3 岡崎3回調査の「てもらう+ていただく」の場面別点数増加パターン

これ以降は12場面別に3回の調査の結果を考察しよう。図1で利用した技法を使い、第1, 2, 3次の調査間隔を忠実に表す形でグラフを提示する¹¹。多くの場面で3回の調査結果が直線で表現された。時系列を忠実に示すという技法の有効性を語るし、また岡崎調査3回の信頼性の高さをも表す。

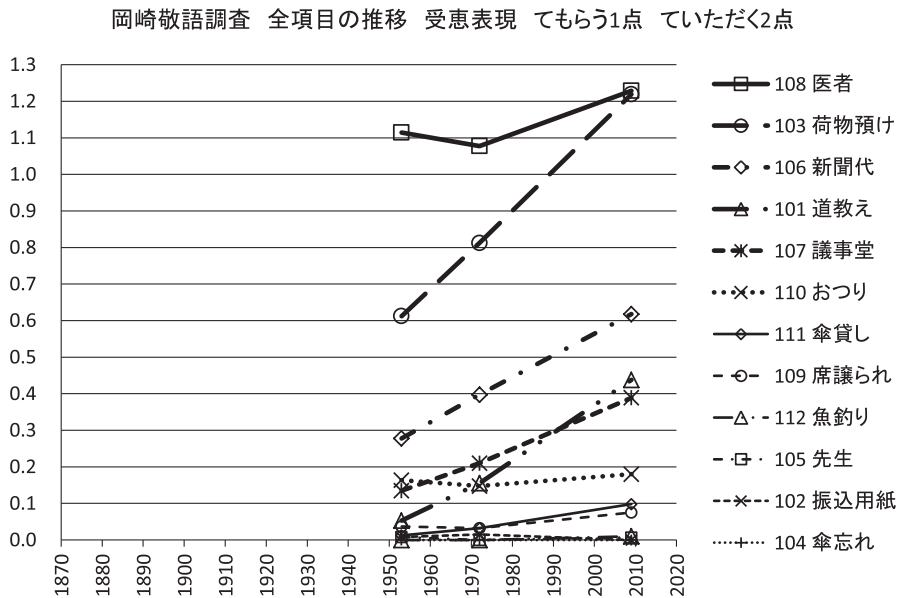


図3 岡崎 全項目の受惠表現の推移の散布図

図3は、図2と同じデータに基づくグラフである。3回の調査の結果を時系列に忠実な形で示す。多くの場面で直線的増加を示す。線を前代に伸ばすと、1900年前後で横線の0に交わる。例外的に増加を示さない場面は、医者とおつりである。

2.3 年齢層別100年の「てもらう+ていただく」点数増加傾向

この節では年齢層別の増加傾向を扱う。図4では、図1と同じ散布図技法を拡大し、「てもらう」1点、「ていただく」2点とした平均点で3回の調査の各年齢層を、調査実年代のずれを忠実に反

¹¹ 3時点の線の傾斜を外挿すると、左に出発点としての年代を想定できる。単純に考えると明治維新のあたりが出发点になる。他に様々な線を想定できるが、詳論は他稿に譲る。ここではグラフ左側に空白の年代をとって、19世紀に発生したかの印象を示すにとどめる。

映した位置にプロットした。第1次1953年を細点線、第2次1972年を鎖線、第3次2008年を実線で区別した(図11～15についても同じ)。横軸は生年、縦軸が使用数(平均点数)を示す。

敬語に関する世論調査やアンケート調査の分析経験から、10代は未熟で、将来の敬語の予測に役立ちにくいこと、社会的活躍層として30代前後が敬語使いこなしのピークになることから、折れ線グラフの30代に◆マークを付けて目立たせた。また30代が全体の平均値に近いこともある。このマークは3回の調査の折れ線が重なってみづらいときに、3本の線の判別にも役立つ。

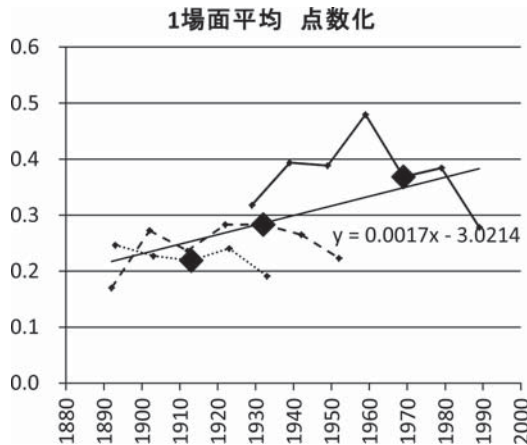


図4 岡崎「てもらう+ていただく」平均点 世代別散布図

まず図4の全体を考察しよう。線が単純でないのは、現実の複雑さを反映している。近似直線を手がかりにすると、3回の調査を通じて点数が増えている¹²。また30代の回答(◆)も近似直線に沿った形で増えている。30代が全世代の平均値に近いという予測は正しかった。またグラフで垂直にみると、1940年前後に生まれた人の場合などで、同じ世代でも、調査の時期が後になるほど、点数が高くなる。つまり「てもらう+ていただく」を多く使うようになったことが分かる。鶴岡音韻共通語化で「跳ね上がり」と言われた現象である(井上2011)。

10代と60、70代がパターンを乱しているようである。3回の調査で右端の10代の数値が低いのは、場面の位置付けが社会的に変った可能性も否定できないが、受惠表現を使う場面に十分に接していない未熟さのためと考えられる。敬語は個人がライフスパンの中で新たに習得するもので、社会的活躍層として身につける¹³。敬語現象の多くが壮年期に最大値を示す。ある場面での適切な表現として受惠表現「てもらう」「ていただく」が社会に広がり、成人後習得 late adoption が行われたと説明できる(Boberg 2004, 井上2011, Inoue and Yamashita in press)。高年齢層に関しては、岡崎調査での人数が少ないことが原因だろう¹⁴。グラフ上で70代を細い線に加工

¹² 後述図15で字数が減っていることと対照すると、意義深い。

¹³ 儀式、ことに葬儀に関する知識などは、経験を重ねることが必要なため、人生後期に身につくことが多い。

¹⁴ 第1次調査の60代は14人(5.7%)、第2次調査の70代は16人(4.0%)、第3次調査の70代は38人(12.4%)である。話し相手が自分より年下なので、敬語を使用する必要がない(上下敬語がまだ残っている)という

して目立たなくすると、すべての年代で使用率が上昇することが分かる¹⁵。

2.4 「てもらう+ていただく」点数の半世紀の増加を示す散布図

以下の節では場面の順番の変化を扱う。散布図は、二つの時点の数値の対比にも役立つ。図5第1次×第3次場面別散布図は、図2のデータを使ったもので、半世紀の変化をくらべるためのグラフである。線で結んだ場面の順は第3次調査の値による。相手への負担度など、ポライトネス理論との関係がみられる。医者と荷物預けが上で、すべての調査を通じて受惠表現が多い。

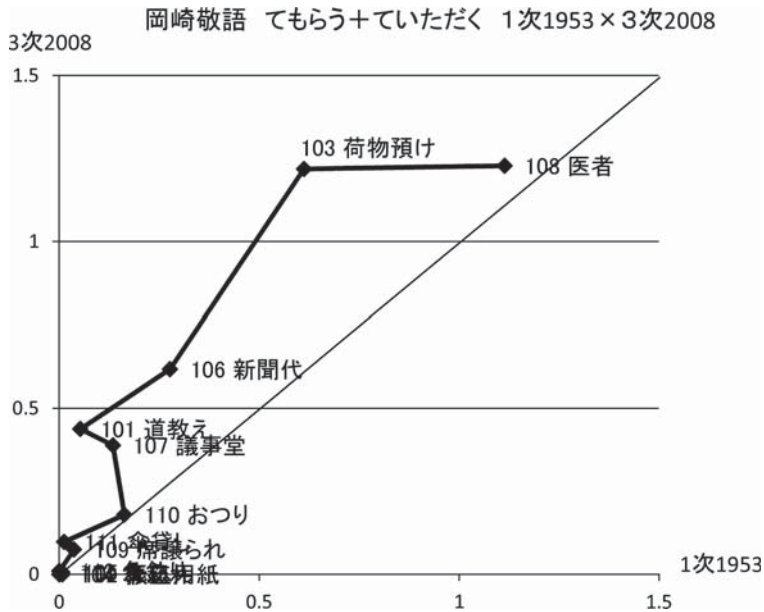


図5 岡崎「てもらう+ていただく」平均点 第1次×第3次場面別散布図

右上の医者は対角線に近い。昔から同程度に使われていたのである（図13で「てもらう」を分離して、増えたことが分かる）。対角線より左上は、「てもらう+ていただく」の点数が顕著に増えた場面で、荷物預けが目立つ。左下のうちの4間、新聞代、道教え、議事堂（道聞き）、おつりは、中間の順番にあたり、依頼表現として、情報のやりとりがある。左下のおつりなど他の6項目は原点付近で、変わらない。昔から使われなかったのである。

岡崎では聞き手に依頼する場面で、依頼表現として、受惠表現がよく使われるようになった。これは敬語の民主化・平等化を示唆する変化と言える。「司会（閉会）させていただく」などの

可能性も考えられる。これは同一人物を追跡したパネル調査のデータと照合して確認できる。または高齢化により適切な反応が得られなくなったせい。記憶と言語磨滅には一般に鏡像性がある。人生後期に身につけたものは早く忘れられる。なお、方言敬語を使用するために、「てもらう」「ていただく」を習得していないという可能性は少ない。調査では方言敬語はほとんど出なかったからである（松田他2012）。

¹⁵ 10代の答えを無視すれば、増加傾向はもっとはっきりする。

近代の拡大用法, 敬語的誤用 (使いすぎ) の典型ではない。詳しくは, 第3節の「てもらう」「ていただく」を区別したグラフで考察しよう。

2.5 「てもらう+ていただく」点数と丁寧さの散布図にみる敬語との連動

以上の場面の順番は, 何に基づくものだろうか。以下では3回の調査それぞれで, 「てもらう+ていただく」点数と丁寧さとの散布図を用いて考察する。(丁寧さ3段階は数値が小さいほど丁寧という値なので, 以下のグラフでは縦軸の数値を反転した。) 第1, 2次調査報告書の丁寧さに関する順番とくらべても, 上位の医者と荷物預けは一致するが, それ以下の場面の順番は一致しない。最初に図8で第3次の結果を大まかにみると, 場面はきれいに三つに分かれる。第1, 2次のグラフでもこの3区分を利用して解説する。

図6に岡崎第1次調査の「てもらう+ていただく」平均点×丁寧さ(3段階方式¹⁶)の散布図を提示する。両者には強い関係がみられる。医者から道教えの4場面については, 依頼表現と敬語の丁寧さとが似た基準で使われていたと解釈できる。しかし他の場面では, 丁寧さが上でも「てもらう+ていただく」がよく使われるわけではない。

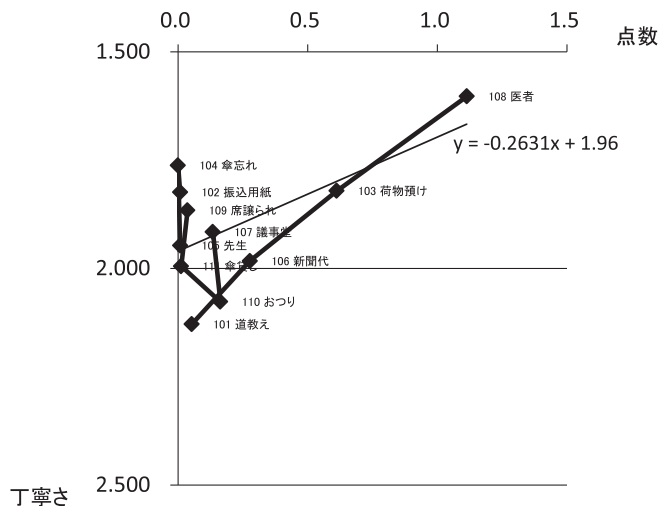


図6 岡崎第1次「てもらう+ていただく」平均点×丁寧さ 散布図

図7に岡崎第2次調査の結果を示した。敬語との比例関係がグラフから読み取れる。医者・荷物預けから道教えにかけての4場面では, 「てもらう+ていただく」点数と丁寧さが第1次同様の際立った相関を示す。他の場面はここでも目立った関連性を示さないが, 第1次とくらべると配置に変更があった。

¹⁶ 第1次と第2次の調査結果を全体的丁寧さの段階で3段階および5段階に, 野元菊雄が判定した。第3次調査については, 同様の基準で松田が判定した。3段階は基本的には「ダ体=常体」「デスマス体=敬体=丁寧体」「デゴザイマス体=特別丁寧体=御丁寧体」に対応するので, 問題が少ない。

図8に岡崎第3次調査の結果を示した。横軸の「てもらおう+ていただく」点数によって、きれいに3区分できる¹⁷。医者、荷物預け、新聞代、道教えは、丁寧さと連動する。医者と荷物預けは上位で他と離れた値をとる。医者への社会的地位の効果が薄れ、医者への恩恵（命を預かるという感覚）が変化したためと考えられる¹⁸。

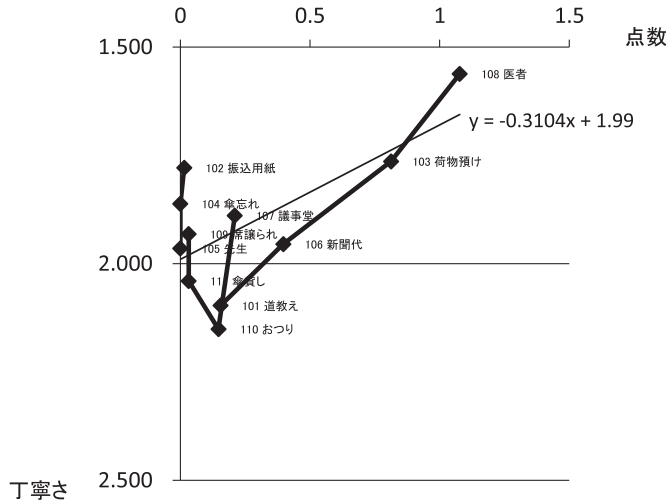


図7 岡崎第2次「てもらおう+ていただく」平均点×丁寧さ 散布図

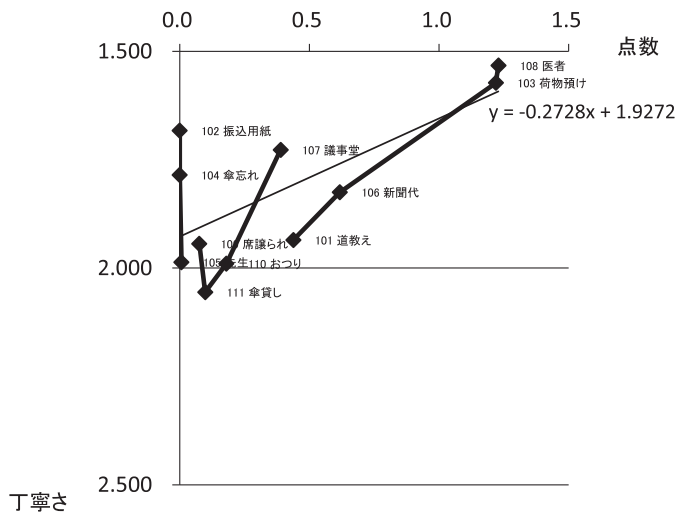


図8 岡崎第3次「てもらおう+ていただく」平均点×丁寧さ 散布図

¹⁷ 第3次調査の「てもらおう+ていただく」の順に線で結んだから当然である。

¹⁸ 往診という習慣がなくなり、患者を運ぶのが普通になるという言語外の要因の作用もある。

その他の場面のうち、議事堂、おつり、傘貸し、席譲られなども丁寧さと比例関係を示すようになった。これらは相手の負担になることを表現しはじめた場面である。議事堂は、実際は道聞きで、やはり相手に説明を要求する。傘貸しは、逆に相手に恩恵を与えるが、押しつけがましさを伴う。おつりは、相手に確認を要求する場面である。以上は、依頼表現として扱うことも可能で、「てもらう＋ていただく」類の表現の必要性和論理的に結びつく。受惠表現自体の新しい論理に基づいて使われるのだろうか¹⁹。

振込用紙、傘忘れ、先生の場面では「てもらう＋ていただく」が使われないが、丁寧さでは差がある。振込用紙は要求して当然の行動である。傘忘れは相手に恩恵を与える。先生（子ども紹介）は、相手の負担や恩恵と関係のない場面である。しかし将来「ていただく」が進出すると、このような場面（文脈）にも使う人が出る可能性がある。全体として「ていただく」と丁寧さとの比例関係、相関がゆるやかになった。

こう考えると、受惠表現「てもらう＋ていただく」は、相手との受惠関係や、心理的負担の度合いを反映するものととらえてよい。以上の順番は、現代共通語の敬語として「てもらう＋ていただく」が多用され、文化審議会（2007）の「敬語の指針」でも基準設定に迷うような、進行中の言語変化の反映である。明確な基準で区切ることは困難で、連続体としてとらえるべきであろう。敬語の民主化・平等化に結びつく変化である。

3. 「てもらう」と「ていただく」の別傾向

3.1 「てもらう」の増加と「ていただく」の増減

3.1.1 「てもらう」と「ていただく」の区別

第2節では、受惠表現全体を見渡したいという欲求により、「てもらう」1点、「ていただく」2点として、点数化し、総合点で考察した。個別にみる必要もあるので、第3節では、それぞれ別語形として考察する。その結果、「てもらう」「ていただく」が一部異なった行動を示すことが分かった。以下のグラフで縦軸は各個人ごとの12問全部の平均値（使用率%など）を示す。横軸は西暦で、調査年と被験者の生年のへだたりを「時系列」として忠実に示す手法を用いた。年齢構成が違うので平均年齢で示す。

3.1.2 「てもらう」の漸増と「ていただく」の急増

以下では「てもらう」「ていただく」を区別する。まず図9と図10をくらべると、図9の「てもらう」の使用度数は少ない。全体として右上がり、3回の調査を通じて一定速度で使用率が増大したと解釈できる。医者、荷物預け、新聞代で急に増えた。場面の順番はこれまで「ていただく」点数によって考察したものと同様である。この非敬語の表現については、わずかの差で荷物預けが医者の上位に立つ。また「おつり」の場面でも第2次の使用率が落ちている。

¹⁹ 以上の場面の順番は、松田他（2012）の丁寧さの主成分分析の結果とは一致しない。

岡崎敬語調査 全項目の推移 受惠表現 てもらう 出現回数

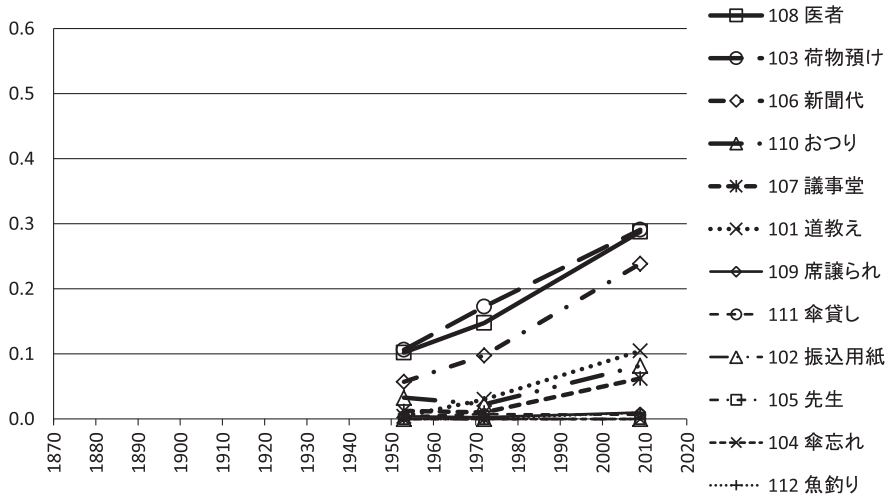


図9 岡崎「てもらう」使用度数 場面別実年代散布図

岡崎敬語調査 全項目の推移 受惠表現 ていただく 出現回数

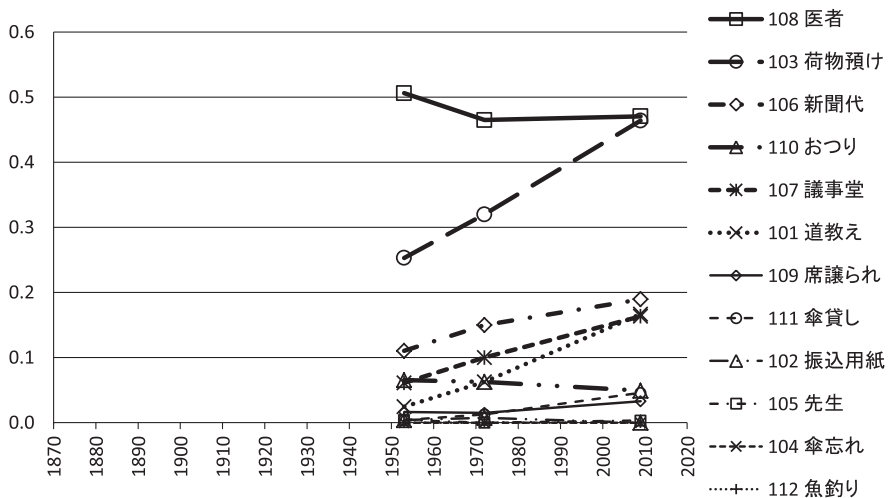


図10 岡崎「ていただく」使用度数 場面別実年代散布図

図10は「ていただく」の使用率を示す。図9にくらべて全体の使用率が大きいようにみえるが、医者と荷物預けでの多さによる。そもそも依頼表現が出やすい場面かどうかの問題になるが、第1次で依頼表現の少なかった項目でも第3次で増えたのは、日本語全体のすう勢の反映とみられる。荷物預けでは、敬語的表現が急に増え、3回の調査でみごとな直線的増加を示している。線を左に延長すると、19世紀に出発点があったかのようにとらえうる。荷物預けの場面の順番は

これまで考察したものと同様である²⁰。他の言い方は微増か横ばいか減少であり、敬語と連動するわけではない。

圧倒的だった医者への「ていただく」が、図 10 で減少気味であることが目立つ。往診を頼むことが少なくなり、また医師と患者との力関係、社会的関係が変化したことも影響している。第 3 次の質問文で「(近所の) お医者さん」のようにカッコ内が加わったためでもあろう。敬語の民主化・平等化の発現とみられる。なお、この医者への「ていただく」の減少が、これまでの全体の平均点に影響を及ぼしたと、みることができる。

下位の項目では「てもらう」と「ていただく」の使用率の違いが目立たない。前述のように「ていただく」が依頼場面で急に進出した。

3.2 「てもらう」と「ていただく」の 3 回調査 100 年の年齢層別増加傾向

3.2.1 場面別実年代グラフの技法

これまでは全員のデータの考察を優先し、回答者の年齢層によって回答を分割して論じるのは後回しにした。以下では年齢層に分ける。また第 2 節で示した技法を適用して、3 回の調査の各年齢層グラフのプロット位置を、時系列に対応する形にした²¹。

前述のように、3 回の調査は等間隔で行われたわけではない。以下では年齢層別、世代別に 3 回の調査結果を共通のグラフ形式で提示する。エクセル散布図の技法を活用し、生年の絶対年代でグラフ化した。

3 回の調査の時代差と、各調査の世代差とが重なって、全体の傾向が読み取りにくいこともあるので、すべての点（各調査の各年齢層）の数値の推移を大まかに示すために、全年齢層の値の近似直線と数式をグラフに示す。

3.2.2 「てもらう」と「ていただく」の年代別増加傾向の違い

上で「てもらう+ていただく」平均点の全体像をみた。第 2 節でみたように、「てもらう」と「ていただく」では、使用状況に差があり、ことに医者での用法に大きな時代差がみられた。これを検証するために、「てもらう」と「ていただく」を分離して集計する。結果を先取りして示すと、同じ年齢層の 2 回または 3 回の点を比較すると、年配の人の使用率がやや増えている。ただ 3 次の 10 代から 40 代は点が一つしかないため比較できない。

図 11 では、全項目を通じての「てもらう」の使用率の推移をみる²²。近似直線でも、3 回の調査と各調査での年齢層に応じた急な増加が示される。30 代の数値の違いはもっと大きく、ことに第 3 次調査の 30 代がピークを示す。今まさに大きな勢いで増えている。

²⁰ 図の凡例の順番は、他の図と一致させた。

²¹ なお、このアイデアを拡大すると、3 回の調査の各年齢層の平均年齢を計算して、生年を基準にプロットすることもできる。ただし実際に作図したところ、岡崎データではほとんど見た目の違いは生じなかった。

²² 図 11 と図 12 では、対比のために、Y 軸の数値に場面ごとの平均使用回数を用いた。図 13 以下では、場面ごとの回答者中の使用回数の比率を % で示した。

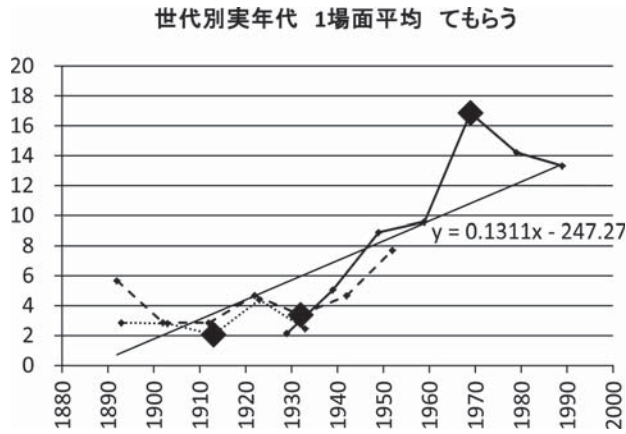


図 11 岡崎「てもらう」平均点 世代別実年代散布図

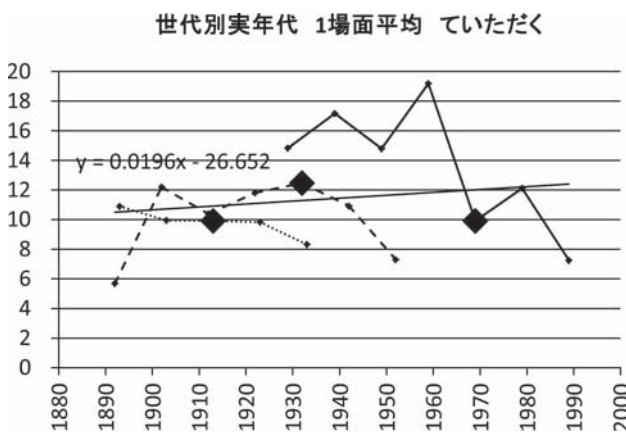


図 12 岡崎「ていただく」平均点 世代別実年代散布図

図 12 では、「ていただく」の使用率をみる。近似直線でも、30 代の数値でも、3 回の調査と各調査での年齢層に応じた増加は目立たない。前述のように医者での場面での漸減が大きく影響したと考えられる。前述「てもらう」の年齢差は、実年代の長期の言語変化をほぼ反映した。これに対し「ていただく」の年齢差は、30 代以上が多い点で、実年代の長期の言語変化と逆の傾向を示す。かつ 3 回の調査での跳ね上がりが大きい。個人内の言語形成期以降の習得、成人後習得を示す。社会的な活動で耳にして気づいて意識的に（あるいは無意識にアコモデーション accommodation として）採用する現象で、現代の東京で起きているのと同じ変化である。例えば、コンビニ敬語の「よろしかったでしょうか」「のほう」などが非難されても広がるのは、同メカニズムにより、敬意低減の法則にあてはまるからである。

以上、受惠表現自体は広がっているが、敬語形の「ていただく」を使うかどうかは、他の要因に支配される。岡崎では最近の東京の若い世代での「ていただく」多用と別のメカニズムが働いているようである。

3.2.3 岡崎 3 回調査の場面別の増加パターン

個々の場面についても図 11～12 と同様の点数計算ができる。「実年代グラフ」のシートを使って、散布図技法による折れ線グラフが 30 枚ほどできた。

3.3 「てもらう」と「ていただく」の医者場面 100 年の例外的傾向

ここでは特別な動きを示した医者場面についてのみ考察しよう。これまでの図と違って、グラフの縦軸上限は 100% である。図 13 に示すように、医者への「てもらう」は着実に増えている。

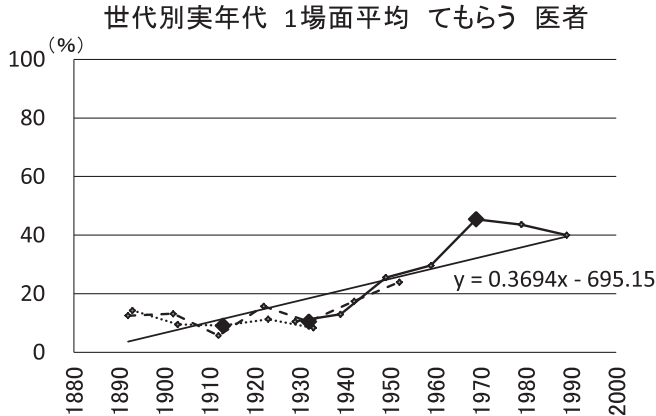


図 13 岡崎「てもらう」医者 世代別実年代散布図

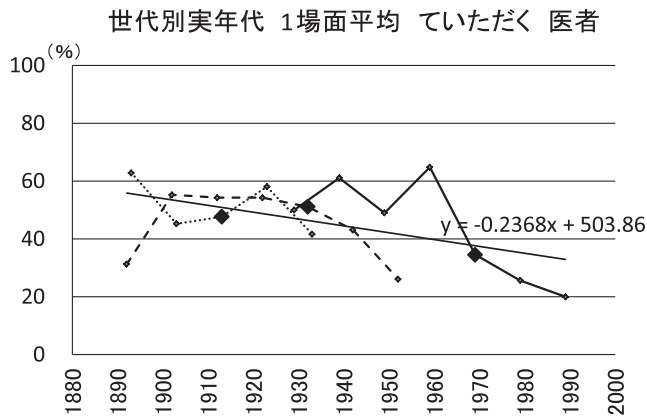


図 14 岡崎「ていただく」医者 世代別実年代散布図

しかし図 14 に示すように、医者への「ていただく」は減少している。本稿で扱う多数の項目のうちの例外である。医者に往診を頼むという、かつてはありえても今は考えにくい状況が影響していると思われる。また敬語的顧慮のパターンが変化したためもある。身分、地位を考える中世的（封建的）基準が戦後まもなくは残っていた。

医者場面単独でみるのではなく、他の場面も含めて全体像を考察する必要がある。図 14 同様のグラフを他の場面でも作図して考察すると、確かに「ていただく」は他の場面では着実に増加している（井上 2012d）。図 10 からも推測できるので、紙数の関係上他の 10 場面のグラフ提示は省略し、詳論は他の機会に譲る。

4. 敬語の過去と未来

4.1 「ていただく」の増加にみる敬語使用原理の変化

以上、岡崎調査の受惠表現のデータを、時系列に忠実にグラフ化するという技法によって、変化が一定の傾向性、法則性をもって進行していることを確認できた。「てもらう」「ていただく」のような、受惠表現や方向性という、いわゆる敬語以外の関連現象で、ことばづかいを調節する。このような上下関係から親疎関係へとという変化傾向も、敬語の民主化・平等化を指し示す。これらの見通しをもとに、さらに研究を発展させることが可能である。

4.2 字数減少傾向と受惠表現の増加

ところで、一般に発話や文の長さが「丁寧さ」に影響すると考えられ、受惠表現にも関連があると想定される。岡崎調査の回答の字数が多くなったためだけで受惠表現が多くなったとしたら、これまでの議論は幻にだまされたことになる。第 3 次調査での増え方は、反応文が長くなったためとも考えられる。

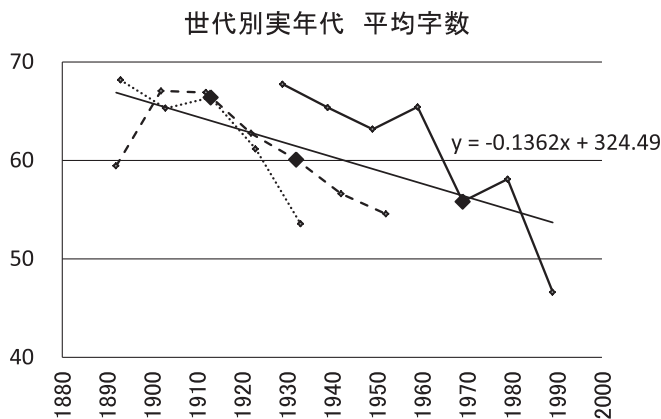


図 15 岡崎 平均字数の世代別実年代散布図

字数の計算は、電子化された岡崎データでは簡単である²³。図 15 に示す。3 回の調査の年齢差を通してグラフ化してみると、減少傾向を示す。3 回とも中年以上は字数が多く、若いほど簡潔である。ただし同じ世代の人は後の調査で（つまり年をとると）長い表現を使う。

だとしたら、若い世代が談話のどの要素を使わないのかも課題になる。相手の領域（縄張り）に踏み込まないように、ことばを使わない傾向が出た可能性もある。松田他（2012）によれば、傘貸し場面で「補償ストラテジー」および「相手の困った状況に言及した頻度（割合）」が減少している。他の場面でも同様の推移が予測される。一方簡潔な別のストラテジーを活用して円滑なコミュニケーションを図っている可能性もある。

対人交渉として声をかけるか、どのような言い方をするかには、地域差がある（小林・澤村 2010）。一般に都市化・都会化が進むほどことばを使うことが多くなる。産業構成から言っても、第 1 次、2 次、3 次産業になるにつれてことばに頼る場面が多くなる。村社会、村落社会では、家族か親戚のように気心の知れた仲間が多いので、ことばに頼って説得したりする機会はそれほど多くない。受惠表現「ていただく」の進出は、この文脈で考えるべきである。岡崎調査の字数の推移は、独立に検証されるべきで、「ていただく」と字数との関係については、別稿で考察する。

4.3 岡崎データの有用性と分析視点拡大

4.3.1 敬語使用基準の変化とポライトネスの要素

南（1987）の考察における「顧慮」すなわち敬語使用の際に考慮に入れられる要因にも変化がある。古代絶対敬語では話題の（人物、神仏の）地位だった。敬語の出発点としてのタブーから引き継いだ要素である。その後の相対敬語では、人物間の関係にも顧慮が及ぶが、身分、社会的地位に基づく。現代の丁寧語化の進んだ敬語では、聞き手、面前の（また居合わせた）人物への顧慮が優先し、話題の人物は、デスマス体に連動して敬語的顧慮を受ける傾向がある（井上 1999）。

ポライトネス理論では、以下の 3 要素によってことばが調整されると仮説をたてている（Brown and Levinson 1987）。岡崎の諸場面がこの 3 要素によってどう位置付けられるかを考える価値がある。

フェイスを脅かす行為 FTA（Face Threatening Act）の見積もり公式

$$W_x = D(S, H) + P(S, H) + R_x$$

ただし W_x = ある行為 x が相手のフェイスを脅かす度合い、Weightiness

$D(S, H)$ = 話し手と聞き手との社会的距離、Distance

$P(S, H)$ = 聞き手と話し手の相対的権力、Power

R_x = ある行為 x の押し付けがましさを程度の絶対的な順位付け、Ranking

²³ 各個人の字数の合計を出してそれを場面の数で割り、さらに年代に分けて平均を求めた。

4.3.2 ディスコースポライトネスの可能性とわきまえ理論

ポライトネスを一連の談話連鎖の中でとらえる研究が日本で盛んになった。談話におけるポライトネスの動態的変動は、例えば学生の（初対面）談話で観察可能である。現代日本語では、ダ体、デスマス体の使い分けが親疎関係の表出手段として短時間で変動するからである。しかし現代ヨーロッパの諸言語では、二人称代名詞などは数週間または数年の単位で変化した後固定する傾向があるために、ディスコースポライトネス（Usami 2003）の研究は困難でありうる。ちなみに井出（2006）は「わきまえ」として日本語敬語を位置付け、英語などの「働きかけ」と区別した。現代日本語で敬語使用基準の変質がみられるわけである。

4.3.3 岡崎調査分析のための追加語形

岡崎データでは多様な分析が可能である。本稿では、その1例を提示した。従来は文法的な敬語に着目していた。今後は「敬意表現」に拡大し、さらに拡張して、ポライトネス理論をはじめ社会言語学理論との関連を図る必要がある。

岡崎敬語報告書における「丁寧さ」の段階付けと関連付ける形で、ストラテジーや方言敬語などを分析しているが、循環論法になるのではないかという指摘が、公開研究発表会（2012.6.2）であった。それに回答すれば、丁寧さを説明するのに何がどう利くのかを確かめるのだとしたら、循環論法ではない。例えばすべての場面の回答（反応文）について、尊敬語・謙譲語、文体（ダ体、デスマス体、デゴザイマス体）、呼称・代名詞（回避も含めて）の使用を確認し、また単語の文体的レベル（「本日」と「今日」などの違い）などをも考慮に入れて、多変量解析にかければ、何が「丁寧さ」の判定に働きかけたかが分かる。

しかしそれにとらわれず、さらに視点を多くとることも考えられる。文法的敬語がほぼすべての品詞に及ぶことについては、丸山（1941）参照。敬語を敬意に関わる表現としてとらえた場合に、様々な単語が関わることについては、南（1987）、井上（1989）などがある。

「ていただく」と直接対照される現象として、本来の敬語（助）動詞の使用減少がみられる可能性がある。近代敬語史の動きからみると、謙譲語が衰退していると予想される。岡崎データで「お～する」のような付け足し敬語、「うかがう、まいる」のような言い替え敬語の出現を、受恵動詞と同じ方法で拾うことが、出発点として考えられる。

また縮約形、方言形に着目し、文体論的にも分析でき、記述調査との対応を図れる。方言敬語もみたい（松田他 2012）。岡崎報告書（国立国語研究所 1983）で、敬意の減少が指摘されているからである。「(て)みえる」「(て)おられる」が典型である。方言推量（勧誘）表現も興味を引く。三河の「じゃん（いいじゃん）だら（うまいだら）りん（見りん、食べりん、書きりん）」は、検索したところ岡崎調査データでは出現しなかった。他の着眼点の候補として、カ抜き疑問文（井上 1999）、終助詞（なあ、のう、ねえ）がある。「お～」もみたいが、これは出現数が小さいので、出てきた語形を個々にあげるほうがいい。

語彙論では、単語単位で、語種、品詞、出現頻度数、基礎語彙・日本語教育級別との対比が可能だろう。形態素解析ツールの「茶釜」などで処理して、すべての単語を判別できれば、その後

の多様な分析が可能になる。談話研究との対応を図り、タグ付けが行われれば便利だ。文法論で言えば、文単位に、文構造を分析できる。単文・複文・重文も相違を示すだろうか。

岡崎データを一種の談話コーパスとしてとらえ直すことも可能である。談話データとしては、課題記入型のアンケート調査（自由記述式調査）または Thematic Apperception Test²⁴ と同列に扱える。談話単位に、依頼・命令表現の出現や、談話パターン、メタ言語、メタ談話の分析ができる。また杉戸（2001）の考えるような注釈、ことわり表現、自然談話における繰り返し表現、談話分析で扱う導入、主題（主張と理由の順番）などの分析をするときにも、個人の回答の全体を見通すべきである。なお回答文にテキストマイニングの技法を適用したらどうなるか、可能性を試す価値がある。

以上は、従来の岡崎敬語分析と別方向で、すぐには総合に向かわず、個々の現象の分析をし、その後、回答（反応文）のほぼ全体を多変量解析に付して、全体像をつかみ直す、という発想である。

4.3.4 第1回答以外およびパネル調査データ

今回の分析は松田作成のデータによる。今後もこの形で進めるが、将来は第1回答以外も扱うべきである。第2回答以下は（同じ社会的属性の）回答者が増えたと扱える。相互に関連の深い表現を答えるはずだから、同じ社会条件の人の関連性をもっとよくみえるようになる。また回答の数が増えるから、信頼性が少し高まる。

さらに、第3次調査の113番以降の反応文のデータはまだ扱われていない。実はここに第3者敬語や鶴岡調査共通項目があって、理論的には面白い。今後の課題にする。

本論文では、3回の調査のそれぞれ異なった回答者を扱った。一方で岡崎調査では、以前の調査相手を探し出して、同じことを聞いている。このパネル調査について扱うと、同一個人が成長（または老化）などに伴って、（または世の中の動きに従って）敬語をどう変えたかも分かる。研究課題は、大きくかつ広い。

4.4 敬語史の中の岡崎データの有用性

4.4.1 対照研究への発展

岡崎データの分析結果は、広く世界史的視野におくべきである。ネウストブニー（2003）の言語近代化論の位置付けは有効で、固定的の身分敬語は中世的と考えていい。これに対し動的役割敬語は近代的である。近代社会においては、個人がさまざまな集団に属し、多様な役割をにない、それに応じてことば、特に敬語を動的にTPOに合わせて変える（大石1983）。これが岡崎敬語にも反映されている。

また、例えば外国語との対照は、簡単な手続きで可能になる。調査票の場面を当該言語に訳して、表現の丁寧さを比較すればいい。国際共同研究の出発点となりうる。井出他（1986）による

²⁴ TAT；主題統覚法， 絵画統覚検査， 主題統覚検査， 絵画統覚テスト。

日米対照研究を発展させたものになりうる。

4.4.2 日本語方言史の中の未来

方言敬語はみごとに日本語方言の歴史を反映する。つまり地理は歴史を反映する。岡崎調査の100年間の調査結果は、文献で補強することもできる。東海地方においては、彦坂（2006）の広範な研究と接続できる。また明治大正期の東海地方の方言文学作品があれば、岡崎敬語の老年層のデータとほぼ同一コーホートを扱うことになる。岡崎の中でも、第3次調査での若い世代の場面のとらえ方、「ていただく」などによる場面の順番などに、世代差がありうる。ただし敬語の成人後習得の可能性もあり、単純に未来を指し示すとは断言できない。

ことばの研究は自己完結的な目標に向かうのではなく、もっと広い目的を目指すのが望ましい。研究成果が未来のために役立つことを祈る。イギリスの歴史家 E.H. カーの次のことばを思い起こそう。言語研究にもあてはまる。

「歴史とは過去と未来との対話である」

参考文献

- Boberg, Charles (2004) Real and apparent time in language change: Late adoption of changes in Montreal English. *American Speech* 79(3): 250–269.
- Brown, Roger and Albert Gilman (1960) The pronouns of power and solidarity. In: Thomas A. Sebeok (ed.) *Style in language*, 350–377. Cambridge: MIT.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness—Some universals in language use*. London: Cambridge University Press. [ブラウン、ペネロピ、スティーブン・C・レヴィンソン；田中典子（監訳）（2011）『ポライトネス』東京：研究社.]
- 文化審議会（2007）『敬語の指針（PDF）』http://www.bunka.go.jp/1kokugo/pdf/keigo_tousin.pdf
- 彦坂佳宣（2006）『方言文法事象の伝播類型についての地理的・文献学的研究』科研費報告書。
- 井出祥子（2006）『わかまへの語用論』東京：大修館書店。
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』東京：南雲堂。
- 井上史雄（1989）『言葉づかい新風景（敬語・方言）』東京：秋山書店。
- 井上史雄（1999）『敬語はこわくない』東京：講談社。
- 井上史雄（2007）『その敬語では恥をかく！』東京：PHP。
- 井上史雄（2011）『経済言語学論考一言語・方言・敬語の値打ち一』東京：明治書院。
- 井上史雄（2012a）『岡崎敬語の現代史と世界の敬語史』国立国語研究所理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表会（2012年2月19日、国立国語研究所）発表資料。
- 井上史雄（2012b）『美化語「お」の循環過程と幼児語の「お』』『明海大学外国語学部論集』24: 35–51。
- 井上史雄（2012c）『横文字雑誌名（ことばの散歩道）』『日本語学』31(6): 65。
- 井上史雄（2012d）『岡崎敬語の現代史』『日本語学』31(11): 2–13。
- 井上史雄（2012e）『日本語敬語の変化とアジアの敬語』三宅和子・野田尚史・生越直樹（編）『社会言語科学シリーズ1「配慮」はどのように示されるか』1–27。東京：ひつじ書房。
- Inoue, Fumio & Akemi Yamashita (in press) Change in the use of beautifying “o-” and late adoption—A historical interpretation of data one decade apart. *Proceedings of METHODS 14 London Aug 2011*.
- 菊地康人（1997）『変わりゆく「させていただく」』『言語』26(6): 40–47（大修館書店月刊『言語』編集部（編）2012『言語』セレクション 第2巻』東京：大修館、248–255に再録）。
- 金田一京助（1959）『日本の敬語』東京：角川書店（金田一京助全集編集委員会（編）1992『金田一京助全集3』東京：三省堂に再録）。
- 小林隆・澤村美幸（2010）『言語的発想法の地域差と社会的背景』『東北大学文学研究科年報』59: 162–127。
- 国立国語研究所（1957）『敬語と敬語意識』東京：秀英出版。

- 国立国語研究所 (1981) 『大都市の言語生活』 東京：三省堂。
- 国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較』 東京：三省堂。
- 国立国語研究所 (1989～2006) 『方言文法全国地図 (GAJ) I～VI』 東京：大蔵省印刷局／財務省印刷局 (V)／国立印刷局 (VI)。
- 国立国語研究所 (2010) 『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』 科学研究費補助金研究成果報告書 第 1～4 分冊。
- 丸山林平 (1941) 『日本敬語法』 東京：健文社。
- 松田謙次郎・阿部貴人・辻加代子・西尾純二 (2012) 「岡崎敬語調査報告—継続サンプルの分析—」 『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』 37-54。
- 南不二男 (1987) 『敬語』 東京：岩波書店。
- ネウストブニー, J.V. (2003) 「日本人の言語行動の過去と未来」 『朝倉日本語講座 9 言語行動』 1-28. 東京：朝倉書店。
- 大石初太郎 (1983) 『現代敬語研究』 東京：筑摩書房。
- 佐野真一郎 (2008) 「『日本語話し言葉コーパス』 に現れる「さ入れ言葉」に関する数量的分析」 『言語研究』 133: 77-106。
- 杉戸清樹 (2001) 「敬意表現の広がり」 『日本語学』 20(4): 22-33。
- 鈴木智映子 (2000) 「小学生作文にみられることばの変化：特に敬語の変遷をめぐって」 『学習院大学国語国文学会誌』 43: 14-25。
- Usami, Mayumi (2003) *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現—日本語語用論入門』 東京：明治書院。
- 柳田国男 (1963) 『定本柳田国男集 第一八巻』 東京：筑摩書房。
- 吉岡泰夫 (2000) 「敬語使用と規範意識の社会差・地域差」 『計量国語学』 22(6): 239-251。
- 吉岡泰夫 (2011) 『コミュニケーションの社会言語学』 東京：大修館書店。

One Hundred Year's Tendency of Increase of “-te itadaku” in Okazaki: Democratization of Honorifics in the Case of Benefactive Expressions

INOUE Fumio^a KIM Soonim MATSUDA Kenjiro^b

^aMeikai University / Invited Professor, Department of Language Change and
Variation, National Institute for Japanese Language and Linguistics

^bKobe Shoin Women's University

Abstract

This paper describes real-time changes in the use of honorifics in Okazaki over nearly 100 years. The tendencies in Okazaki clearly reflect the history of Japanese and also coincide with world trends.

Recent developments in real-time analysis of linguistic change in progress have found that linguistic change can occur within an individual long after adolescence. Here we present another example of a phenomenon known as late adoption. The data come from the Okazaki Survey on Honorifics, a 55-year-long repeated survey on change and variation in honorific use, including speaker awareness, in Okazaki City, Japan, with nearly one thousand informants in total.

The case in point involves the late adoption of the honorific verb *itadaku* ‘take, receive’, which as part of a serial verb construction, expresses the meaning of humbleness. The *-itadaku* construction begins to appear late in the Okazaki Survey data, and it was first used not by the youngest speakers, but by middle-age speakers. This late adoption of *itadaku* is best explained as a consequence of social value of honorifics in Japanese society, where, traditionally, the mastery of honorifics is seen as a passport into the world of adults.

The late adoption of *itadaku* is also a manifestation of a universal of honorific change, as it involves a change from power to solidarity, a tendency that is widely known from the historical change of the second-person pronouns in the Indo-European languages. The spread of the *-itadaku* construction thus constitutes another example of the democratization of Japanese honorifics.

Key words: real time survey, age difference, style shift, honorifics, change in progress